

「今、私の晴雨計は！」^⑩

「EXITの流行！」

平山征夫

最近、新聞・雑誌に「BREXIT(ブレグジット)」という言葉がよく登場している。イギリスの「EU離脱」を意味する言葉で「Britain Exit」または「British Exit」を縮めた造語である。これだけ使われているというのは、イギリスのEU離脱が予想外の結果で世界に大きなショックを与えたということだろう。「Brexitショック」と言っても良い。日頃、建物などの出口を表す「EXIT」の表示には馴染みがある私も、初めてこの造語を見たときは一瞬分から

なかったが、すぐ理解すると同時に「上手い！」と思った。正規の英語表現「Withdrawal of the United Kingdom」よりはるかに分かりやすい。

国の危機に当たり女王陛下の国らしくキャメロンの後任には女性のメイ首相が決まり、離脱ショック後の市場の不安定さも少し落ち着きを取り戻してきたように見えるが、離脱の本質的問題は何も解決していない。

思い起こせば一九九七年、EUがスタートして数年経過したという頃に、知事として本県とオランダ・北ホランド州(アムステルダム市を中心とする二五〇万人くらいのオランダの中心の州)との交流調印に訪れた。調印後の夕食

会で州知事、議長などのほかABNアムロ銀行の頭取など経済人を含むオランダ側に「EUはどうか。オランダにどういうメリット・デメリットを及ぼしているか」といった質問をしたところ、「貿易拡大など成果は大きい。加盟希望の出ている国々の追加と、二〇〇〇年を目途に通貨を統一して一層の結束を図りたい」と言う答えが返ってきたので、「元中央銀行マンとしては賛成しかねます。加盟国を増やすほど経済発展状況などが異なる国々が同一歩調を取ることは困難になるうえ、通貨統一は国家間の経済調整策として最も重要な“為替の自動調節機能”を放棄することになるので大問題です」と申上げたが、

オランダ側の強い意志は変わらなかった。統合強化の理由は、金融経済要因ではなく歴史的政的要因であり、その信念の強さにはハットさせられたのを今も鮮明に覚えている。それは「我々ベネルックスの小国は、フランスとドイツという二つの大国に挟まれ、永年両者の争いの犠牲となり、振り回されてきた。今後両国が二度と戦争をしない為には通貨も一緒にしておく方が良く考えたのだ」と言うもの。「心情は良くわかりますが、共同体自体がいくら経済的に持たなくなるリスクは高いですよ」としか答えようがなかった。

今回のイギリス離脱が他の国にも波及するのではと強く危惧

されているが、そこには他のEUメンバーの中にも共通の問題があるからだ。その最大の問題はEUが統合を維持し強化するため次々と打ち出してくる共通政策が、参加国の主権と衝突するうえ、遵守が結構負担となっていることだ。巨大な官僚組織となったEU委員会は、まさに「欧州政府」という存在になっており、欧州政府が打ち出す政策が、個別の国としての主権と合わない場面（今回の難民受け入れ問題はその代表）が増えていくからだ。でも良く考えればそれは国家間の経済統合などを行えば、当然起こる問題である。問われるべきは優れた調整機能を持っているかだ。

イギリスの離脱を受けてEU

が抱えるこうした課題について議論が行われるべきだろう。EUの中にも統制をもう少し緩くするべきという意見もある。EUだけでなく世界にはほかにも同様の経済共同体があるが、大なり小なり同じ課題を抱えている。それに加えて、考慮すべきは、ある地域の経済的メリットを目的とした「国家間の経済統合」は、グローバル化による国家間の経済格差拡大と共に、地球上の地域間格差拡大を齎すことだ。経済統合には共同体内の優れた調整機能が必要と言ったが、もう一つ地球上の地域間の格差調整機能こそ必要なのではないか。先進国の発展途上国に対する開発援助はその役割は果たしていない。

そんなことを考えている時、ふと頭に「BREXIT」とともに「IKEXIT」、「AKBEXIT」、「ABEXIT」などの造語が次々と浮かんできた。意味はお判りでしょうか？

（順番に紹介すると、「私・征夫さんのこの世からの離脱」、「AKBメンバーの現役引退」、「安倍首相の政権離脱」である。お粗末でした）

（平成二十八年九月一日）